

「Iの横棒」に関する小調査

金枝岳晴

Kanaeda Takeharu

はじめに

外国人のための日本語教室で、「『そ』は、ひと筆で書いてはいけません。『ぞ』のように2画で書くのです。それ以外は不正解です」と指導していたとしたら、それはおかしい話だと私たちは感じるはずである。手書き文字の形には個人差があり、どちらの「そ（ぞ）」も正しいからである。

実はこれと同じようなことが、日本の英語教育においても行われていないか、私は少し心配な気持ちである。同じようなこととは、「Iの横棒」についてである。この横棒を「書かなくてはいけない」とする指導が今でも続いているのではないかと思われるからである。

「Iの横棒」とは何か

次の2種類の活字を比べていただきたい。

ABCDEFGHIJKLMN**O**PQRSTUVWXYZ

ABCDEFGHIJKLMN**O**PQRSTUVWXYZ

上段の活字はいわゆる「ひげつき文字（セリフ体）」であり、下段は「ひげなし文字（サンセリフ体）」である。見てわかるとおり、Iの横棒はセリフ体活字の装飾であり、隣の文字のHなどにも同様についているものである。

このセリフの発生については諸説あるようだが、石に文字を刻む場合に文字の高さをそろえるためのガイドとなる線に沿って^{のみ}鑿を打ち込んだときにできる痕を装飾化したものである、とする説が有力らしい。

いずれにしても、もともとIの横棒は活字の飾りであり、手で書く場合には付けても付けなくて

もよいものである。

英国エクセターにて

私は2007年の夏、英国エクセターにおいて2か月間の研修に参加する機会を得た。研修での個人研究テーマは、「英語学習におけるドリル、プラクティスについて」であったが、それとは別に、「Iの横棒」について個人的な小調査を行った。

〈調査の方法〉

英語を母語とする人たちに次のような2つの質問をした。

(Q1) How do you write/form an uppercase 'I', 'I' or 'I'?

と記した紙を見せた上で、次のような例を見せ、あなたの手書き文字はタイプAか、タイプBかと聞いてみた。

Type A: I like Illinois.

Type B: I like Illinois.

Illinois という語を選んだのは大文字のIで始まっており、次の文字が小文字のlだからである。次に2つめの質問をして、コメントを聞いた。

(Q2) Do you think type A 'I' is confusing with a lowercase 'l'?

〈結果〉

エクセター大学の英語を母語とする教員、職員、学生の合計23人から話を聞くことができた。内訳は教員15人、職員4人、学生4人である。

(Q1) について、

type A (横棒を付けない) : 11人

type B (横棒を付ける) : 13人

であった。合計すると24人になるのは、1人が「両方使う」と答えたからである。

(Q2)については、次のとおりである。

Yes (小文字のlと混同しやすい): 17人

No (小文字のlと混同することはない): 6人
(コメント)

いく人かの方から、コメントをいただいた。中には興味深いコメントが見受けられる。

- ・Iなのかlなのかわからなくなることなんてあり得ない。
- ・Illinoisと書くのなら、Iに横棒を付けるかもしれないけど、普段は付けない。
- ・Iに横棒を付けるのはアメリカ人じゃないかな。
- ・私の身の回りの人は横棒を付けない人の方が多いと思う。
- ・小学校では横棒は付けないように習った。
- ・小学校では横棒は付けるように習った。

この聞き取り調査のあとで、「なぜこういうことを調べているのか」と聞かれることが多かった。私は「日本では『Iの横棒』を付けないのは誤りだとする指導が多いので、それは誤りだという証拠を集めているのです」と答えると、ほとんどの人が「どうして間違えにするの?」のような反応を示したことも付記しておきたい。

まとめおよび私見

(1) 「付ける」「付けない」について

本調査の目的は、「付ける」「付けない」の割合を調べることではない。しかし、私が予想したよりも「付けない」とする人の割合は多かった。

日本語の「そ」と「ぞ」についてもどちらの書き方の方が多いかはあまり問題ではない。どちらの書き方も「正しい」のだから。「Iの横棒」についても同様である。今回の小調査ではサンプルの数はあまりに少ないが、その「証拠」を十分に集めることができたと言えるであろう。

(2) 「小文字のlと混同しやすい」ことについて

私は(それが活字であったとしても)小文字のlと数字の1のほうがずっと紛らわしいと感じている。インターネットのURLなどで「これは数

字のlだろうか、小文字のlだろうか」という経験のある人も多いであろう。

「小文字のlと混同しやすい」というのは、「Iの横棒は付けなければいけない」と指導する際の常套句である。確かに手で書いたときの「小文字のl」と「横棒を付けないI」は同じ形である。Q2で「混同しやすい」と答えた人の中には、「それぞれを単体で比べたら」というイメージで答えた人も多いのではないだろうか。

これとは逆に、書かれた文章の中でのことを思い浮かべて答えた人もいると思われる。実際、文章の中で「小文字のl」と「横棒のないI」が混同されることなどまずないことだからである。

そもそも本当に混同しやすく、不都合が生じるのなら、サンセリフ体の活字が使用されることはないはずである。例えば、I like Italian food. という文章の最初の文字は小文字のlだろうか、2つめの単語の最初の文字は大文字のIだろうか、などと悩む人はいないのである。

おわりに

「そ」と書くか「ぞ」と書くかは個人の自由である。だから、「『ぞ』と書かなければいけない」とする指導は誤りである。「Iの横棒」についても同じだと思っている。百歩譲って「Iの大文字には横棒を付けなさい」という指導は認めるとしても、「横棒のない大文字のI」は誤りだとする指導には異議を唱えたい。

学校の定期試験や、入学試験で「横棒のない大文字のI」が減点や不正解とならないことを、私は心から願っている。それはあまりに滑稽で哀れなことである。また、検定教科書の中学1年生用の最初の数レッスン(ユニット)の活字はサンセリフ体であるにもかかわらず、Iだけには横棒がついていることにも、私は違和感を感じる。

英語指導の入門期において、このような文字指導が論じられることがあまりないのは残念なことである。「Iの横棒」のことなど些末な問題であると考える人もいるのかもしれない。しかし、私はそのことで減点される生徒が今でもいるのなら、とことんこだわりたいと思っている。

(東京学芸大学附属竹早中学校教諭)